のためには燃料の鋸屑確保がなによりも大切なことでした。大阪から帰ってきた主人は三日目から地下足袋姿の鋸屑確保の専業夫となったのです。

その頃の鋸屑は大変貴重なもので豆腐屋さんお菓子屋さんが競って燃料として求めていたものでした。ですから朝食もとらず朝早く鋸屑を求めて出かけることもしばしばでした。

そうした努力の効果がぼつぼつと現れはじめ営業は十五日となり二十日となり、ついに二日休みの廿八日営業をするまでになり非衛生的と思われていた亀の湯も皆様に喜ばれる銭湯となったのです。

貧しかった日本経済も日本の英知と勤勉さで経済は復興し、四十年代になりますと、高度経済成長という世界に類例がないといわれるほどの経済発展をなし遂げたのでありました。その結果個人住宅は目を見張るような素晴らしいものが建ちはじめ、終戦の住宅にはなかった様な浴室付きの住宅が軒を並べはじめ、このような立派な住宅が建つことは当然の結果として亀の湯のお客さんが少なくなったのでございます。川南、都農、の銭湯も店を閉じとうとう亀の湯だけが細々と東児湯で唯一の銭湯として残ったのです。通常の状態なら同業者が少なくなることは収益が良くなる筈ですが、利用客は減るのですから結果はついに経営は赤字となったのです。

利用客のことを思うとたとえ赤字経営でも廃業する気にもなれず悶々の日がつづきました。併しいつまでも赤字経営をつづけることは不可能なことでした。

心は痛みましたがとうとう廃業する事にしたのでございます。

六ヶ月後に営業を閉じる旨を町役場に申し出て、利用者の皆さんには六ヶ月の間に夫々工面をして

いただくことにお願いしたのです。

五十年の九月のことでございましたがついに亀の湯も廃業したのです。大衆の健康管理にいくらか寄与して参りました。亀の湯も時代の流れには抗しきれず四十年の歴史に幕を降ろしたのでございます。

畑田地区企画整理事業によって、古い銭湯家屋も取りこわされる事になりました。

淋しいことですがこれが時代の流れ移り変わりというものでございませう。

亀の湯よ御苦労さまでした。

思い出

川田　能勢　正盛

昭和の初期、小学校に出始めた頃のことである。

川田には製糸工場があった。これは、高鍋の偉人と慕われた竹原祐吉翁が、明治二十八年に創立されたもので、赤煉瓦造りの高さ四〇～五〇メートルもあろうかと思われた。煙突からは、昼夜をわかたず、繁盛を象徴するかに思われた黒煙が立ちこめていた。高鍋近郊より沢山の人びとが働かれ、祖父母もこの工場に働いたことを、終戦後になって詳しい話をよく聞かされた。当時は現金収入の少ない時代で、地域の人達は生計も楽であったと思う。やがて小学校を終わる頃には、経営者は替わり、働く人も都城方面の人が多かった。

その頃は、養蚕が盛んで、畑の大部分が桑畑であった。春には桑の実がなって、子供の頃には、よく食べて口もとが紫色になったのを思い出す。我家も、蚕を沢山飼っていた。年間には春蚕、秋蚕、晩秋蚕の三回飼育し、春蚕が一番多く、四令になると、八畳の間二部屋と、十二畳半の部屋が

蚕棚でぎっしりであった。蚕の食欲は旺盛で、給桑時には、部屋中がざわめいていた。

養蚕も繭にして出荷するまでには、大変な手間のかかる仕事であるけれども、農家にとっては、欠くことの出来ない主産業であった。

又父は其の合間に副業として、荷馬車業をしていた。当時は物を運ぶには、これしかない時代で、近隣地区に沢山の仲間が居られた。これには馬が原動力で飼い付けについては、大変やかましくいわれた。又農耕と両方で二頭の馬を飼育していた。

高等科になった頃から、夏から秋にかけて朝の馬草刈りは、毎日の日課であった。漸く、所要の草を刈って、天びん棒で担いで帰る頃には、早い友達は登校している。急いで帰り麦飯に冷汁をかけて朝食をかき込み学校に急いだ。

又学校から帰ると、夕方まで馬の世話及び飼料の準備等で、遊ぶ暇はなかった。夏休みに友達と魚取りや、遊び等の記憶はないが、田園の草取り、桑園の除草等が強く印象に残っている。

夕方遅くまで田の草を押していると、こんな光景を見る。製糸工場の女工さん達が、かすり模様の浴衣姿で裾をからけて、下着の色もあでやかに、群をなして溜池の堤防に、或いは、小丸川に大勢の洗濯組がおしゃべりしながら、行交う有様は大変にぎやかで夏の風物であった。

昭和九年三月高等科を卒業し、青年学校に入校

した頃より、家の農業を継ぐことになった。
当時の耕作面積は、水田、畑を合わせて約二町歩であった。経営面に就いてはもちろん父であるが。
十四才の時から父に馬耕を教わり、又農家におけるしつけについても、祖母より厳しく仕込まれたので、作業面については、自分で出来るようになった。農家にとって一番の難関は、田植時の田圃の代掻きである。これも近所に大先輩が二人居られて、若輩ながら共同作業に加えて頂き、指導を頂きながらなんとか務めを果たした。又その頃は田圃に入り代掻きをする時でも素足である。田圃には、緑肥としていろんな物が切り込んであるので、小さい傷を無数に負い、入浴時には、ひりひりとしみこんだものである。よくも破傷風にかからなかったと思う。
学校も多いに、軍事教練が多くなっていった。昭和十三年だったと思うが、我が家の馬を含む、地区から三名の飼い馬が徴発されて、三名共馬と共に貨車に詰め込まれ、馬の世話をしながら善通寺まで行き、馬に別れを告げて帰る途中の寂しさが、忘れられなかった。
昭和十三年には、郡主催の競犁会が妻町で開催されて、これに参加することになり、大会の前日に馬を引き鋤を担いで、妻まで歩いて行き、その晩は付近の農家に泊まり、お世話になった。その晩も何回か馬の見廻りに起きて、熟睡出来なかったことを思い出す。当日は多くの選手が勢揃いして居た。馬が主で、牛も若干いたようだった。
競犁規定は（鋤起こし巾）五尺畝三列（長さ）三十間（深さ）六寸、持ち時間は一時間であった。
審査の結果一等に入賞し自信を得た。その翌年高鍋にて開催され昨年の要領であった。今度こそはと落ち着いて競技が出来て優勝したことが、深

く印象に残っている。

戦後の台風の思い出

水谷原　永友　タヅル

昭和十七年縁あって川南から水谷原に結婚して来ました。父母、主人、私四人でした。十九年に長女が生まれ、主人は再び召集がきて戦場に行きました。それから子供を連れて親達との生活が始まり、田六反畑一町歩位の小作百姓をする事になりました。その時今のように何の前ぶれもなく急にはげしい枕崎台風に見舞われ、木という木は護路部隊の兵隊さんに切り出され、山は裸むき出しの様子。私は子供を背中にしばり付近の人に手をそえてもらい、やっと近くの兵隊の作った防空壕に逃げ込み、生命がありました。防空壕の中には水がたまり、村中の人、（老人、女、子供）それぞれ入っておられ、あるおじさんは米の入った袋をかついで立っておられ、あるおじさんは外の方から走って来られたと思ったら、「家が倒れてバァさんを押さえつけた。早く来てくれ」と叫ばれるけど老人子供ばかりの事、こわくて誰も出て行こうとはしなかった。台風が少しおさまって出て見たら、びっくり。地区の三分の一の家が半つぶれ、私の家も倒れ、入れなくなっていました。この時今の南九大の入り口にあった、何百年か太平洋又高鍋を見下ろしていた名木二本松もポッキリと折れていました。

昔の兀の下

兀の下　前田寅雄

私達の若い頃は、牛馬の飼料は自分の田の畦草でありました。足りない所は川原に馬をひいて草刈りにいったものです。草の立っている所を見た時は朝早くに起きて行かないと、他人に切られますので、早起きして馬に乗り川を渡り出掛けていました。今は牧草は自分の田や畑に作っています。又蜂の巣が川端の上の方にある時は、洪水が多く発生する年であると聞かされていました。

どうも当たっている様に思っていました。洪水になると、小丸川は今の西小学校から兀の下の前迄、一面の洪水になり、兀の下の前を流木が流れていました。終戦になって帰った時妻の話では、始めて座敷の上迄洪水があり畳等を台の上に揚げた話をしてくれました。戦後は今のような堤防が出来て、大変有難く安らかに休み暮らす事が出来る事を感謝しています。

私の歩んだことなど

菖蒲池東　大峰實

私は、大正十年一月一日に東諸県郡八代村に生まれ、七才の時に八代尋常高等小学校に入学、昭和九年三月に同校の高等科を卒業し、昭和十二年始めより宮崎市の長井竹材店へ工員として入社、昭和十四年に竹材店を退社し、昭和十五年に都農町の村﨑自動車に助手として入社し、高鍋の合同トラック会社と合併、昭和十七年二月二十七日自動車運転免許普通を取得致しました。その時二十二才でした。其の間、徴兵検査がありましたが、何と丙種合格といわれ、がっくりきました。しか

し、運転手として五、六、部隊や川南の落下傘部隊等に、合同トラックより貸切で良く行ったものです。

そうして世界大戦が始まり二年ぐらいのちに召集令状がまいこんで吃驚致しましたが、令状を受取って行かないわけにはいかず、広島の暁部隊に船舶整備兵として入隊致しましたが、何と戦時中というのに整備どころか明けても暮れても防空ごう掘りばかりで、かんじんな船舶整備にはまったくつけてもらえず、やがて一年が来ようと言う時に、四国の小豆島に転勤となり、そこでは学校の校舎をかりて兵舎として使用していましたが、何とそこでも防空ごう堀りが主で、たまに手旗信号のけいこ等をさせていただきました。六ヶ月ぐらい立って、ようやく小型船艇のエンジン（日産）の整備を二人でさせていただきましたが何と二日ぐらいで終わりました。其の後も二度防空ごう掘りばかりでした。其の内に終戦をむかえ、二年間の兵役を終え生まれ故郷へと帰って来ました。九月伊勢湾台風に見舞われ住家が倒れてしまいましたが母と二人でしたので、どうすることも出来ず近所の家に宿を借りていました。翌日大工をしていた二番目の兄さんが宮崎より帰って来て、モウソウ竹を切って二人で掘立小屋を立てて何とか住めるようにと桂も竹タルキも、ハリも、竹で屋根は杉皮の古い物をのせて母の一人暮らしには何とか出来るようにして置いて、兄は宮崎に、私は再度高鍋合同トラック会社へ行きました。合同トラック会社で八年間を努め、九州土建の社長と、トラック会社の社長の話合いで九州土建の方に行き、そこで十一年を努めましたが九州土建が倒産したため、大林砂利に努める事になりそこで十二年間努め定年に成って六十一才でやめて現在にいたっています。

狐のいたずら

坂本　永友藤雄

冬のある日、鴫野の橋口村会議員が議会がすみ夜になって同役達と四季亭で痛飲した。やっと散会となり自転車で帰路についたのが午前一時前だった。兀の下―坂本―勝利―鴫野道を坂本はずれの尾崎のハナにさしかかった。此処は左が雑木林、右は竹藪が覆い繁って益々暗い。おまけに下には水が流れ落ちて半分壊れた水車が「カッタン、コットン」と陰気な音で回って薄気味悪い。自転車には灯火が無い。自分は一ぱい機嫌だし丑満時の直前だ。狐が目をつけるには絶好のときであったろう。此処を過ぎると道は左に行けば東光寺右に行けば勝利への二又路に出た途端「オギャー　オギャー　オギャー」と泣く赤ちゃんの声に混じって「ホラ　ホラ　ヨシ　ヨシ」と子供をあやす若い女の声がした。ハッと脳裡をかすめるものがあったが、大胆不敵なこの人は自転車の速度を増して現在の持田保育園との中間左側に大きな四基の無縁墓（現在は九基）の前に来ると泣く赤ちゃんを抱っこした若い女を見たとき狐の悪戯とは思ったが総身に水を浴びたように髪の毛が一本立したが気をとり直し「えらい賑やかぢゃんすのー」と言ったがさいご後をも見ずに無我夢中に自転車をコイで、迷惑とは思ったが勝利の森八雄さん宅に駆け込み提灯を借りて無事に帰ったそうだ。しかし其の後も、狐に目をつけられるのは男の辱だと思い誰にもこの事は話さずにきたがたまたまこの人の姉である私の祖母と狐の話になり私の前で語ったのがこの話である。

嫁女がほしい

坂本　永友藤雄

その男の名は「みつ」さんと言った（本名はおそらく三男か満（ミツル）だったろう）。

自分も適令期になったのにトント嫁とりの話しがない。他の同年輩の友達は皆嫁女をもらって楽しそうに暮らしているのを見るにつけうらやましくてしかたがない。ヒョッとすると自分の親たちは俺が年頃になっているのを忘れているのではなかろうかと思うと気が気ではないが、だからと言って自分から直接嫁女がほしいとは言えない。いろいろ考えた末一計を思いついて早速実行することにした。

或る冬の夜中親たちはいつまでも囲炉裏端に寝そべって腹をアブリながらボソボソと雑談をしている。絶好の機会だと思い切って寝ていた布団を頭からかぶって小便にいくのに囲炉裏端を通って行った（当時便所は外庭の角に有った）両親は驚いた。「オイオイ「みつ」よいくら寒くても小便に行くのに布団を着ていくアホーがいるか」と小言を言った。「フン後に誰も寝ている者はないしかまわんが」とウソブイて悠々と用をすまし自分の寝床にもぐりこんで様子を窺っていると両親が「うちの「みつ」も年頃じゃけん嫁女がほしっじゃもんの、早く嫁女をもらわんといかんもんの」と話す声がした。

こうして彼の目論見は成功した。それから間もなく嫁女もらいの話があったがなかなか実らずまだこの後二、三の才智に富んだ面白い話があるが又の機会にしましょう。

茅ふきの里

中尾　林　　ツタエ

昔は茅ぶきの家は、どの村に行っても見られました。

屋根は高くきれいに、はさみでつみそろえてあり新しくふきかえた屋根などは、本当にきれいでした。

学校かえりの道々など、色々なかたちの家を見ながら帰ったものでした。ぶげん者どんのお家はきれいだったなぁと子供心に思いました。屋根は山にはえている、すすきとかツバメ芽でふいているそうです。上の方には広い瓦がのせていて雨よけになり、のき先の方も瓦がふいていました。ほとんどの、お家はのき先まであつくふきおろしてきれいにつみそろえてきれいでした。それに昔の家は根石で出来ていました。今日のようにブロックとかセメントがなかったからでしょう。新しい家を作る所にはたくさんの大きな石があつめて有り、大工さんがシルシをつけた所に（石をすえる所）地づきをしていました。長い三本柱を組みあわせ滑車をつけ、それに大きい丸太を付け三本の取っ手を付けて、綱を引く人、丸太をおろす人、そんな時面白い音頭がありました。音頭と云って

も、余りわからないのですが、綱を引く人下ろす人がうまくあうように、唄っていたのでしょう。
「よいとまけ、それ、まひとつおまけに、よいとまけ、よいとまけ」
「とうちゃんのためなら、それどんとやれ、どんとやれ」、色々なおはやしを唄いながら、石をおくところを、かためて行きます。戦前は麦わらぶきの屋根が多く、かごしま小麦はわらが長いのでたくさん作っていました。屋根のふきかえなどには、村の人達が皆でして、古い麦わらを取りのぞく時など、すすだらけで、かおは真っ黒で皆でわらいました。茅ふきの家は、冬暖かく夏はすずしいと云われております。おくど様、いろりの上はカベ土で天井は作られている所もあったそうです。其の頃は町の方でも炊事はたき木を使っていたのではないでしょうか。
大平寺の上の方に、川上神社がまつって有り、森も深く今も村の方々が、おまつりしておられると思います。其の下の方を流れる、大平寺川の水で、水車小屋が出来ていて精米所が有り、米、麦、粉、など出来ていました。麦は丸麦で其の頃ハダカ麦は平たくするきかいがなかったので、御飯は丸麦の御飯でした。麦は夜にたくさん入れておきます。たく時は一度あらってお米と一緒に朝たきます。其の頃平たくするきかいも出来ましたが雨や曇りの時むしろにほして、かんそうしなければいけなく、かびがはえたり、赤くなったりして困りました。昨年は外米のさわぎが有りましたが、私達が子供の頃にはお米屋さんに、外米も売っていました。長いお米で、御飯にたくと石油くさいとも云っておりました。

若き青春時代の思い出

蓑江　柿原繁樹

昭和六年十一月十八日文教の町高鍋に生まれ、昭和十二年四月高鍋幼稚園に入園しました。あの当時の先生が岩村コエン先生、野口澄子、文子の両先生姉妹でおられました。三人共やさしい先生で遊戯や歌、図画なども習いました。十三年四月高鍋尋常小学校（現高鍋東小）に入学しました。当時父が県職員であった為、翌十四年都城に転勤になり私も都城市立明道小学校へ転校しました。十五年頃から政府が作らせた隣組が始まり各隣保班毎に毎月常会があり歌も出来ました。其の頃から防空演習も行われる様になって来ました。そして十六年十二月八日太平洋戦争勃発、十九年三月戦局の悪化していった激動のさ中明道小学校を卒業し四月に県立都城中学校へ入学しました。入学して早や七月サイパン島が玉砕し日本への本土空襲が始まり敗戦の色が濃くなって来ました。それぞれの家ではあちこち庭に防空壕を掘り又、天井板もはずし沖縄からも児童生徒が疎開してきました。戦争の激化と共に学校も上級生は学徒動員令により軍需工場へと、又私達下級生は農家へ勤労奉仕へとしてかり出されました。授業等はあまりなく二十年になると大都市はほとんど焦土と化し八月六日広島原爆投下と同時日に都城も昼間空襲を受け母校明道小学校市役所等も全焼しました。それから八月十五日正午天皇陛下の玉音放送があり、日本は連合国に降伏し、遂に戦争は終わり平和が訪れ、学校も再び正常な授業に戻りました。当時私は中学二年生でした。各学校では奉安殿の取りこわしも行われました。やがて都城にも進駐軍が駐屯して来ました。それを見ると敗戦国民はあわれであり、しばらくは食糧難が続き苦しい毎

日で、母は近所の人達と一時は田舎に買出しに行きました。此の敗戦のどん底から日本を立ち上がらせたのは何と言ってもスポーツでありプロ野球、六大学野球、中等野球も復活し盛んになりました。

二十三年度学制改革により学校も泉ヶ丘高等学校になり二十五年に卒業し、其の年父が再び高鍋に転勤になり十一年ぶりになつかしい故郷へ帰って来ました。振り返って見るとあの当時若者達の青春時代は一体何だったのでしょうか。もう二度とあの様な悲惨な戦争はくり返したくありません。何時迄も後世に平和と民主主義を残して行きたいものです。

大正時代のくらしの一端

道具小路南　松岡美也

八十年も昔の事を、平成時代のくらしの中から、思いおこして見ると、まるで夢のような話である。

当時の家々は屋敷も広く、母屋、馬小屋、物置き小屋などがあり、馬小屋の前には広場もあって、この庭は脱穀したり籾を干したり子供の遊び場でもあった。当時は道路も子供達の遊び場であった。

其の頃の我が家の家の構造を思い起して見るに養蚕をする為か部屋数も多く、部屋も広かった。味噌部屋と稱する所迄あった。

台所は日常使う三つの、かまどの他に茶を炒ったり味噌豆を煮たりする大きなかまどもあった。しかし流し台のあたりは、粗末なもので、一寸した棚があり、そこには炊事道具等、少しばかり置いてあったように思う。流し台で使う水は、屋外の井戸から、つるべで汲み上げ、タンゴに移して、流し台の側にある水瓶に入れ、柄杓で汲んで使うと云った念の入ったものであった。

電燈が高鍋に点いたのは、たしか大正四年か五年ころだったと思う。それ迄はランプやローソク等の生活で、誠にわづらわしい手間のかかるものであった。明るくて便利な電燈は当時の人達にとっては、さぞかし大きな喜びであったであろう。でも夜トイレに行く時、やさしかった祖母がローソクに火を灯して連れて行ってくれた、なつかしい思い出もある。　当時の食生活を考えて見るに、お正月とかお祭などには御馳走が有ったが、日常の食卓には何が有ったか、確かな記憶はない。多分野草等を使った自給自足の食生活だったものと思われる。

おやつにしても店で買った菓子等は、めったにわたらず、芋の蒸したものや家になった蜜柑とか柿ぐらいだったように思う。

よそ行きの着物を着て、小遣いを貰ってお祭りに行き、飴や、サトウギビを買うことの嬉しかったことも、つい此の前の様な気がする。

衣類を考えて見るに、着物は皆和服で木綿物、

物資が少なかった為か、ふせたり接いだりの着物も珍しはくなかった。あまり洗濯もして着せてもらえなかったのか、袖口など汚れでピカピカ光っている事もあった。季節の変り目に大きな洗濯物や夜具等、小丸川の綺麗な水で洗いに行く母達に、ついて行ったこともある。洗濯物が干上がる迄の川遊びも楽しかった。

家に出来た繭で糸をつむぎ、大変な手間や時間をかけて織り上げた紬の反物で作ってもらった美しい縞柄の本裁の着物は肩揚や腰揚も多く、身巾も広く仕立ててあって、ズッシリ重かった。

昔の人のくらしは、今考えると大変な苦労があった事であろうと思われる。

あの時代の人達に、今日の恵まれた生活の有る事を予想した人が有ったであろうか。尚又八十年後の人々はどの様なくらしをしていることであろうかと思うことである。

思い出

菖蒲池西　矢野文代

思い出といえば、私達の年齢はすぐに戦中戦後につながるものばかりである。衣食すべて耐乏窮乏の生活である。食の方は言わずもがなであるが、物の面で面白いのは自転車の話である。ないないづくしに、もれずタイヤに、チューブ、全くのつぎはぎだらけで空気をいっぱい入れて乗ると、ガタンゴトンとタイヤの継目でリズムがつく。あまりぱんぱんに空気を入れるといつ、中のチューブが破裂するやらわからない。そのチューブが破れたら自転車屋さんに行く。が自転車屋さんでは自分でやらねばやってくれない。張り方を先客から教わりながらチューブを水につけて穴あきをさがす。穴が見つかったらその箇所を紙ペーパーですってゴム糊をつけて修理用のチューブを穴に見

合わせて大きく切り取って破れないようにチューブにはりつける。タイヤが破れたらそこから切って他の古タイヤの良い部分を重ねてつける。だから二重のところでガタンとなるのである。
そのガタン、ゴトン、の自転車でも大いに活躍したものである。
そのリズム自転車で朝夕を蚊口の浜まで主人と通って塩焚きをした。
醤油も味噌もないから海水を焚いて自分で塩をつくらねばならない。
主人が馴れない足どりで海水を汲み天秤棒でかついで浜辺につくった塩焚鍋（塩焚用の手製鍋、長さ一米以上、深さ二十糎ぐらいの長方型、多分トタン板で造ったのではないか。はっきり覚えていない。）その鍋に海水を入れて一日中焚く。薪は台風で家が倒れた材がいくらでもあった。
真っ白な塩が出来上がる。きらきらと雪の様な塩だった。わずかの畑に麦をつくり、大豆をつくり、まるで農業試験場の様に色々植物をつくった。菜種も植えた。そして味噌をつくり、醤油をつくり漬物をつくった。菜種の収穫で油をしぼってもらった時がとてもうれしかった。いつもお腹をすかしている子供達に充分とまではいかなくても手製のお菓子をいっぱい作れた。
菜種の収穫の後には芋を植える。大根も植えた。見事な大根が出来、豊富とまではいかないまでも、唐芋がたくさん出来ていてそれでどうにか一家七人が飢え死することもなく生きのびてこられたのである。こんな生活を生きぬいてきたおかげで今はどんな窮乏にも負けない思いである。

戦前の盆踊りの思い出

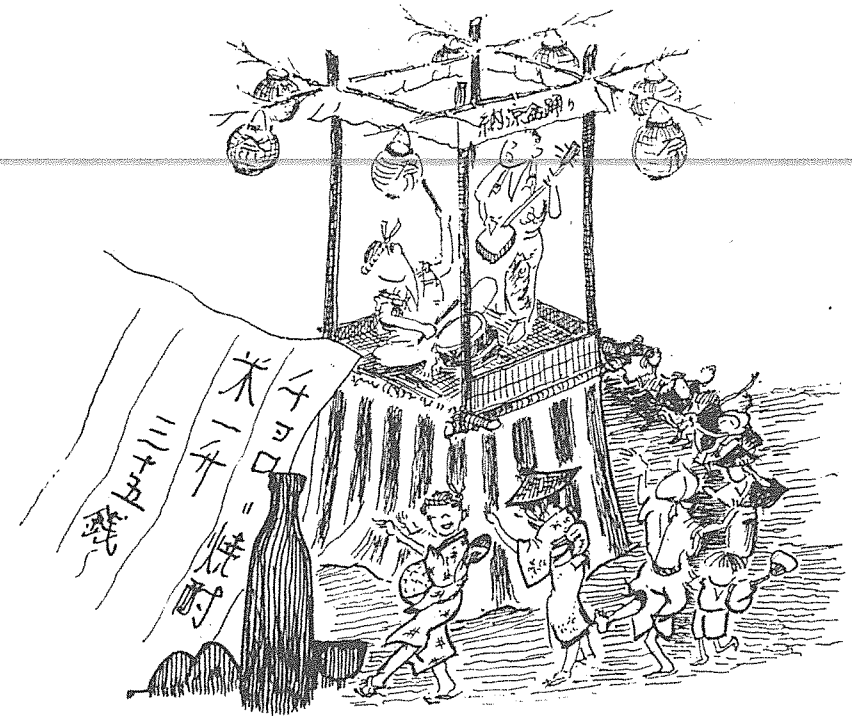
道具小路東　西村　満

戦前は四季の地方行事は旧暦にて行れていた。盆踊りも地方行事の一つであった。道具小路青年会の行事として開催されていたので、盆が近づく一ヶ月前ぐらいから、盆踊り準備に手配をされていた。

戦前は現在の様に、公民館制度はなく、区長制であり、農家には農業実行組合制度がありました。集会所が無いので、神社拝殿か民家に集まっていました。

此の様な時代であったので、何時も河原重光さん宅に集まり、盆踊りを実行することについて、話合いがなされ、先づ予算が無いので、手分けして、道具小路地区住民のかたに寄付をお願いに行き、昭和七、八年頃は、米一升が三十五銭―四十五銭くらいの値段であった。道具小路全体で八十戸数あるかなしかであったので、寄付金が十円余り集まれば上出来であった。盆踊り実行日に午前九時頃より権現神社（現在は熊野神社）の境内に音頭棚の組立てを五、六名で作業をする。手頃な二間余りの杉丸太を六尺四方ぐちの角角に穴を堀り柱を立埋めし、棚を乗せる手頃な所にわら縄でがんじょうに丸棒を縛り付け、その上に、板を乗せる手頃な高さの所に天井を造り、天井には古びた、二、三ヶ所破れた障子を乗せ、四方の柱には笹竹を手頃な物を一本づつ縛り付け此の所に盆提灯をぶらさげ、提灯の明かりが踊場の明かりであった。

盆踊りにかかせないのは、大豆を煮豆に、にぎり飯、チョロを用意することであった。チョロとは焼酎のことである。初めて聞いた時は、なんの事か、わからなかった。年長者の方がチョロとは焼



楽しい言葉の一つに聞こえた。踊り休みの間に踊りを見に来ている人、踊子等に、煮豆、にぎり飯、チョロを接待したものです。当時は紙コップのような物はなく、煮豆は手の平に、にぎり飯は手づかみであった。チョロは湯呑茶碗で接待していた。旧七月十五日御供養盆踊りを始める地区民に知らせ太鼓を午後六時頃より打鳴らし、三味線音頭太鼓の三拍子がそろった段下で踊りが始まる。女装し編笠を被り踊る者、田子作の様に、もも引き腰には腰駕籠を付け、地下足袋を履き踊る者、女装し腹にざるを入れ、子持ち腹の様に仮装して踊る者、その腹を大きくして踊られた人には訳が有り、自分の妻が安産で有ります様に願いを込めて踊っておられた人もおられました。

午後七時頃より、音棚中心に一重ぐらいの輪で踊りが始まり、午後八時頃には何処からともなく踊子が集まって三重、四重の輪に成って踊る様は、酎のことであると、教えて下さった。準備中に「チョロを用意したか」と声をかけられたのだ。

祖先を大事にするその事でもあり、おたがいの触れ合い交流の場と成り、当時の青年期の楽しい踊りでも有り、踊りが盛り上がるのが午後八時頃よりチャラエコセッセと、調子が盛り上がり、チャラエコセッセと、はやしの合間に踊り子の一人がチョロと調子を付けるとほかの踊り子が、だせ、と調子を面白く取り乍ら踊りが、はずむ。

午後十一時頃までは盛んに踊りがはずむ。午後十一時半頃に成ると地区の者ばかりになり、「踊りもここあたりでとどめましょう」の音頭がとられると、三味線も音高く、太鼓は太音に打ち鳴らされ、踊りも終わりと成る。後片付けを午前一時頃までにおわり、板敷拂いの行事が行われる。神にお酒を上げ神社の拝殿で残り物のチョロ、煮豆を肴にして、反省会となり午前二時頃に会長が「皆んな、ご苦労さんでした」と言葉が有ると、おたがいが、「ご苦労でした」と言葉をかわして帰って行く。

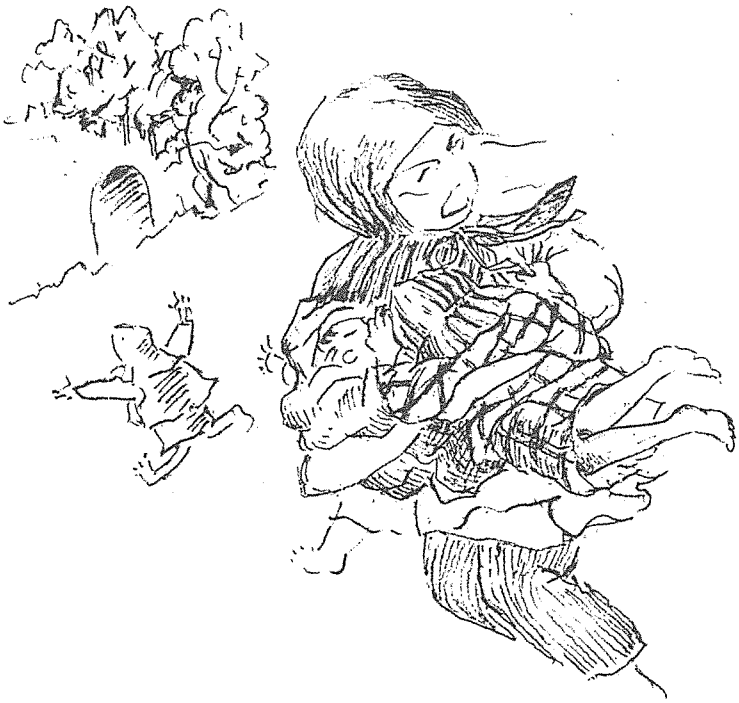
盆月に成ると午後六時ごろから何処からとなく太鼓の音が聞こえて来るので、河原さん所の庭に五、六名集まり、太鼓の音がする方向に歩いて行ったのである。

遠くは現在は木城町、戦前は木城村椎木地区川南町平田神社等色々な地区で踊りが催されていた。風の便りがあり、夜七時頃より歩いて出かけて行ったことが数回あり帰りには、ゆかた、駒下駄を帯でしばり、背中にかるって、裸足でてくてく歩いて帰った事も数回あり、夜中午前三時頃帰りつき、ひと寝し、午前五時半頃に起きて馬草刈りにいったことも何回かある。

若者同志の触れ合い交流が色んな所で出来た思い出が高齢につれて、心しみじみ遠き思い出と成って行く。

遠き日の想い出に

上蓑江　中村　フヂ子

思い起せば昭和二十年三月下旬母と二人で甘藷の種ふせをしていました。つかつかとやってこられた男の方が、中村さんに赤紙が来ましたよと、私は一瞬驚いた。我が家の主人は痩せ細って見るからに病弱で、召集令状が来ようとは、まさに青天霹靂でした。それに家には七才を頭に五才三才生まれて四十日の赤ん坊と七人家族。主人はしがないサラリーマンだった。家の大黒柱を引きぬかれ、中村の家はどうなる事かと見当もつかず、母はといえば「これも人並みだ。どうにかなるさ。」と返って私を慰めて呉れた。当時私は二十代の若さで前後の見境もなく唯おろおろするばかりでした。

その頃より空襲警報が鳴るや四人の子供を抱えだいて防空壕を出たり入ったりだった。母はと言えば俺はそとには一歩もでないぞと頑として動かなかった。毎日防空壕入りで他の事は何も手に付かなかった。出征は四月六日その日は四月には稀